

CVのせいで二回目の人生に集中できねえ！

柳カエル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作など、ない。唯一無二の世界で生きる転生者。原作に基づいた世界ではないのに、ふと気付けば——豪華声優陣と同じ声の人物たちが目の前に現れた。

※物語、登場人物たちはオリジナル&テンプレですが、声優ネタ・他作品のネタを含むため、二次創作です。

目次

CVのせいで二回目の人生に集中できねえ！	1
CVのせいで入学式に集中できねえ！	5
CVのせいで言い訳に集中できねえ！	13

CVのせいで二回目の人生に集中できねえ!

子供のころは良かった。

声変わり前はみんな、似たり寄ったりで変に意識することもなかったからな。

コンクリートが木造に変わり、豆腐の摩天楼まてんろうがほっこりとする民家
に変わったただけだ。武器だって、銃が剣と魔法に変わっただけ。代わ
りの物はちゃんと存在している。

だから、転生者でも順応しゅんのおうして生きていけるんだ。

異世界に転生したところでたいしたことはないと自分に言い聞か
せる。

しかし、これはどういうことだ。キャパシティが足りない。

「ちよつとー! 私のこと、忘れていないでしょうねっ!」

く、くくくくくくく——くぎゆう!? 久しぶりに再会した幼なじみ
が釘〇理恵だど!? ピンクブロンドでツインテールの幼なじみから
発される声が〇宮!? なぜ!?

確かに、ヒロインのような容姿だと常々、思っていたが。

「なに、ぼーつとしてんのよ? もしかして……私に惚れちゃった?」
田舎の凡人でも通える学園の教室を背景に、腕組みで見下ろす幼な
じみ。ちなみに、見下ろしているのはこちらの方だ。

「なにか話さないよー! あ! 私よりちよつと、身長が高いか
らって、調子に乗らないでよね!」

20cmぐらいの差はちよつとだろうか? 唐突なCV発表に俺
は驚きを隠せない。昔は性格がツンデレなだけで、声までツンデレに
成長するとは思わなかった。

ついでに、俺の名前はケント・アルマーニで現代日本から転生した
者だ。男、男と二回目の人生も引き続き男だ。

前世は隠し切れないオタク。声オタで、声優の声を聞けばビビっと
分かってしまう。とはいえ、声優の子供時代を知らない俺に、声の才
能を見抜けというのは酷な話。

声オタの俺が、大御所声優と同じ声の人物に関わってしまうとは――

幼なじみのことを変な目で見ちゃうじゃないか！ 具体的にはこれから一生、変なバイアスが頭の中にまとわりつくぞ！

もし、他にも似たようなケース、人物がいたらどうするべきか……。

「……もしかして、私が誰なのか本気で分からないの!? 嘘でしょ!?

ねえ、ケント！ いい加減にしなさいよ！ さもないと……」

「ごめん。ちよつと考えごとをしてたんだ。だから、燃やすのはやめてくれる？ メル……? 許してくれ、頼む！」

「んふふふ……しょうがないから、許してあげるわ！ 私は器が大きいよ。久しぶりに会ったけど、ケントってば、相変わらずね」

彼女の本名はメルセデス・シュプリーム。メルとは、彼女のあだ名だ。メルが言う『相変わらず』というのは、俺の考え込む癖のことを指しているらしい。

前世からずっと、考えながら喋ることが苦手で、俺が黙っている時は考えごとだというのが、幼なじみたちの間にある共通認識だ。

なんだかんだ懐の深い幼なじみたちにコミュ障の俺は助けられている……みたい？

俺が火だるまになる末路は避けられたようだ……。

—— 燃やすと言ったが、それはメル有能力に関することだ。単純にメルは魔法の力が強く、才能に溢れている。多種多様な魔法の中でもメルは、火の魔法が得意で手当たり次第、燃やし尽くす危険人物。

俺は男友達というより、怒りっぽいメルをいつもなだめる猛獣扱いのポジションに立っていた。

分かりやすいツンデレだったから、オタク知識が役立ったのかもかもしれない。

幼なじみといえば、もう一人——

「うわあ、久しぶりだね。懐かしいな」

爽やかな男の子が、ががががが——

「やあ、メル。ケント。これから、同じ学園の仲間として一緒に頑張っていくこうね」

「ふふん。仲間じゃなくて、ライバルよ。分かったかしら？」

いいいいいいいい、い、石○ア！ 彰ア!? う、裏切りませんよね!?! ただの爽やかキャラですよね！ そうですよね!?!

髪、白髪しらじゃないシイ!? 青髪でもないしい? 黒でもない……ピ
ンクでもない。平凡な茶髪、青い瞳……そういうキャラ、いたっけ?
いやいやいや、原作とはなんも関係ないんだ。きつとそう。それで
あつて欲しい。

「……コイツ、さつきからおかしいのよ」

「ははは、ケントらしいね。別にいつものことだから、大丈夫だよ」

「それもそうよね！ 心配して損したわ！」

ライリー・シャトー。お前もか。

お前も、成長したら大御所声優になるのか。そうかそうかそういう
奴なんだな。

つて、成長したら石○彰になってたまるかあ!!

努力の末にあの声が生まれたはずなのにっ！ あの演技力がっ！

声優は好きだが、決して会いたい訳ではない。声優本人が好きなの
ではなく、声優の仕事ぶりが好きなのだ。

お仕事頑張ってください。そう、心の声をそつと添えるだけ。

そんな俺のオタ活は置いといて、ライリーのポテンシャル——ス
テータスは魔法剣士といった感じだ。風の魔法が得意で、剣術の腕も
磨いている。

そんな男がカッコよくないはずがない。子供のときは、俺が主人公
でメルはヒロインだと信じていたが案外、ライリーが主人公でメルと
くつつくかもしれないな。

「あ！ なんか今、カチンと来たかも！ コイツ、燃やしていいかしら
? いいわよね、ライリー？」

「いや、駄目だよ。というか、幼なじみが幼なじみに燃やされてる姿な
んて見たくないよ。ああ……ケント、早く考えごとから戻って来て
……」

おっと、いけない。ライリーの言う通り、考えごとはほどほどにし
ておかないとな。

クラスで顔合わせをしたら、入学式だ。ここで名前と顔を覚えてお

けば、後は楽なんだ。

さて、教師はどんな人だろうな――

「――騒がしい。静かにしろ、ひよっこ共。俺がこのクラスの担任だ」
す、す、杉○ア!? どう見てもクール系の教師なんですけど! な
のに、銀○が過ぎるんですけどツ! 下品なイメージが強すぎて、純
粋な気持ちで顔を見れない!!

幅広く演じてらっしやるから、意外と思うのはおかしいけれども――

「俺の名前はジーク。ジーク・ヴォルトだ。俺は一度しか説明しない
から、よく聞けよ。……俺に迷惑はかけるな。分かったか?」

きよ、教師が職務を放棄してらっしやる! おい、○田ア! 仕事
しろオ! ツツコミ役、呼んで来てエ!

「なによ、あの教師! 燃やしてやろうかしら?」

「まあまあ……落ち着いて、ケントは大人しくしてるじゃないか……」

「アホ面、晒してるだけでしょ」

「……ううん……」

あ、ライリーにもアホ面だと思われてる。いやー、つつい考えご
とに没頭してしまった。でも、これ――仕方がないよね?

あー、これからこの学園生活……どうなるのかなあ。

CVのせいで入学式に集中できねえ！

俺の心のメモ。

どんな風になっているかというところ——
ケント・アルマーニは俺。

異世界転生者、田舎者、凡人、以上。

メルセデス・シユプリムは幼なじみ。

息抜きのため、俺が生まれた村に遊びに来たお嬢様。あだ名はメル。ピンクブロンドのツインテール。かわいい。

魔法の天才、火属性、ツンデレ、暴力的、美少女。
最近、判明したがCV釘宮○恵。

ライリー・シャトーは幼なじみ、その二。

謎の理由で村に滞在していたが、いつの間にかなくなった謎の少年。茶髪青目。

魔法剣士、風属性、イケメン、優しい、大人しい、爽やか、謎が多い。
以下同文、CV石田○。

ジーク・ヴォルトはクラスの担任。

見た目はクールで、中身は大雑把な教師。黒髪赤目で杉○のくせに、ちよつと恐い。

あんまり分かんらん。剣とか、使いそう。

以下、CV杉○智和。

——こんなもんだ。俺にしてはよくまとまったメモだろう。

メルが杉——ヴォルト先生に突っかかったいきごきはあったが、今はすつかり大人しくなっている。入学式が普通に始まりそうだ。普通通って、最高だよな！

「あーあ、あそこに立っているのが私じゃないなんて、納得できない

……！」

あそここというのは、壇上のことだ。立派な垂れ幕がかかっている。

「無茶……言うなよ」

「ケントの言葉には、一理あるね」

どうやら、入学式の席は名前順ではなく、ある程度自由に座っているようだった。周囲は同じ学年で、あるいは俺たちのように知り合い同士で固まった。

右にメル、左にライリーで幼なじみに挟まれている。右に……釘

〇、左に〇田……。いやいや、余計なことは考えるな！

「おつ、あれが生徒会長か……」

「ふうん、及第点きゅうだいてんつてところかしら」

「お前、何様だよ……」

「二人とも、静かに……！」

どこに待機していたのか、現れた生徒会長が壇上に登る姿に誰もが目を奪われている。

サラサラの金髪に緑色の瞳。まるで王子のようだ。きつと、中身も完璧に違いない、そう考えを巡らせていると――

「皆さん、初めまして。僕は生徒会長の――」

た、炭〇郎!? じゃないっ！ 花〇夏樹さんだッ！ 鬼〇の刃が大ヒットして一般人の注目を集めただけで、花〇さんは以前から大活躍なさっていた。

その実績と実力があったからこそ、鬼〇の刃にふさわしい声優として選ばれたのだ。その名声は決して、鬼〇の刃効果だけではない。

声優の待遇が良くなるなら、どうぞどうぞ〇滅の刃ブームをじゃんじゃん利用しちゃってください！ たった一つの声しか出せないのは、気になるんですけども――

そんな俺の魂の叫びは置いといて、ああああアアアアッ！ 声優が分かったせいで、余計なバイアスがかかってしまう！ 許してください、生徒会長さん！

前世の記憶が邪魔をするんです！ くっ、前世の知識が全く、役に立ってないじゃないか！ むしろ、逆効果では!?

両親とか、健康に生きてらっしやる!? ああ、気になる！ 知りた
い！ CV花〇さんの家族事情を知りたい！ 誰か、教えてエエエ！
生徒会長に詳しい人オオオ！

頼む……俺を……安心させて、くれ……。曇くもらせないでくれ……頼
む。

「本当に今日は様子がおかしいわね……」

「……なにか悩みごとがあるのかもしれないね……」

あ、やべ。生徒会長の名前、聞き逃した。でも、大丈夫だろ。俺に
は幼なじみがいるし。幼なじみに聞けばいいんだ。

「……ねえ、ケント。もし、体調が悪いなら保健室、行こうか？ 僕、
付き添うよ」

「えつと……大丈夫。なんでもない」

「……そっか、辛くなったら我慢せず、すぐ言うんだよ」

うう……なんて、優しい幼なじみなんだ。メルとは大違い——
げっ、メルがこっちを見ている。あの目は危険だ。気をつけないと。
燃やされる。

ハァー、声が石〇だからって、疑った俺が馬鹿だった。優しいCV
石〇は癒される……最高だア……。

「……コイツ、キモ……」

「うーん……僕でも、庇いきれないかな」

落ち込んだ表情から一転、ニヤケ始めた俺に対して二人がドン引き
している。うん。俺でも俺がキモイと思うわ。ごめんね、オタクで。

俺がオタクでも、入学式は続く。そりやそうだ。学園に関係ないも
んな。俺の事情なんて——

「私は学園長の——」

「——ぐっ……！ ふうう……！」

シヤアやないかい！ 学園長、シヤアやないかい！ 濃すぎい！
この学園、キャラ濃すぎイ！ 池〇秀一と言われたら、ピンと来ない
けど、シヤアと言われたらくつきりはつきり分かる人だ！

どんな作品でも、シヤアみたいな役柄が求められてる人だ！ デモ
ンエ〇スマキナにもいた！ アム口とセットでいた！

手で口を押さえて、なんとか耐えたけど……。

「……ちよつと、ケント……うそお……どうしちゃったのよう……！」
「……本当に保健室に行こうか？ 自覚がないだけで、熱があるのか
もしれないよ」

メルは涙目で、ライリーは本当に俺を心配してくれている。俺、下手したら不登校になるかもしれない。だって、こんな学園——俺は耐えられないよ。

俺の不安をよそに、教師がそれぞれ自己紹介をする番が回ってきた。当然、俺のクラスの担任、ヴォルト先生は無愛想で一言のみ。

他の教師を見習ってんだ——

「どうも。音楽担当のナンシーよ。よろしくね」

みゆきちいいいいいい!! 七色の声を持つ沢○みゆきさんだ! ニュースを読み上げてくれて、セクシーな峰○二子やボーイツシユな役もこなす、○城みゆきさんだ! なんかどこにでもいるから、段々その声を好きになってしまうのは不可抗力だと思う。

声の色っぽいナンシー先生は長い金髪を巻いていて、まつ毛も長い。青い瞳がとてもきれいで、スタイル抜群。胸も……でつけえ……。

でかいおっぱい最高! おっぱい、おっぱい!

「どこ見てんのよ……! バカケント! スケベ! 変態!」

「……あはは。懲りない人だなあ」

その声で罵^{のの}って貰えるなら、ご褒美です。でも、そんな幼なじみ嫌だよね。自重するね! CV石○にも『馬鹿』って言われてるし。

「むう……反省してるなら、いいけど。次はないんだから!」

「さつ、二人とも。ちゃんと前を向いて、先生の話を聞かないといけないよ?」

「はーい……」

俺たち二人が改まって正面を向くと壇上には、小柄な少年が立っていた。天才少年とか、そういうやつか。

途端に周囲もざわめきだす。オタクの俺にはよく見慣れた展開だったが、ほぼ同年代に見える少年が教師とは信じがたいのだろう。

「なにあれ……迷子かしら?」

「……そんなはずはないよ。きつと首席とかじやないかな?」

横にいる幼なじみも微妙に勘違いしている。こういうときは俺のオタク知識の方が正しいんだ。見てろよ、見てろよ——

「静粛に! 私は迷子でも首席でもありません。この学園の教師です。皆さんはこの学園の生徒である以上、私の指示に従ってもらいます」

レンズ越しにキツとこちらの席をにらみつける。どうやら、かなりの地獄耳のようだ。つて——

この声、梶○貴! ショタの声から元気な青年まで——明るくてエネルギーギツシユなキャラクターを演じていることが多い声優さんだ。

へー、眼鏡キヤラでシヨタカー。髪の色は明るい水色、つり目がちな赤い瞳。どこか荒^{すき}んでいてフレツシユさはないが、梶○貴さんの声にピツタリだな——じゃない。

花○夏樹にシヤア、沢○みゆき、梶○貴——なんなんだ、この学園は!?! 声オタに厳しすぎないか!?! このままでは悶^じえ死にしてしま
う!

はあ……なんか、呼吸困難になってきた。

「ヒュ……ヒュツ……」

「……このままじゃ、ケントが死んじやう! や、やだあ!!」

「すみません! ケントが、僕の幼なじみが……体調がすぐれないよ
うなので、途中退席させていただきます。僕も付き添います」

俺の異変を感じ取ったライリーが素早く、手を挙げて大人たちを呼び寄せる。お前……注目されるのが苦手なはずなのに、そこまでして俺のために……。

「ゲホツ……大げさだよ……俺は、大丈夫……心配かけてごめん」

「ケ、ケントお……! しつかりなさいよ! バカ!」

「謝る必要はないよ。ゆっくり、深呼吸して……落ち着いて、大丈夫、大丈夫。僕たちがついてるから」

俺がオタクという不治の病に苦しんでいる最^{さなか}中、ライリーは俺の背中を撫でて冷静に落ち着かせようとしてくれている。幼なじみ、てえ

てえ。ありがとう……ありがとう……。

「おい、なにがあつた。説明しろ」

ぶつきらぼうな杉——ヴォルト先生が、駆けつけて来てくれた。不器用なりに、教師として責務を果たそうとしているのだろう。

でも、なにげにヴォルト先生のポーズはなんですか、先生。気になって仕方がない。

「いや、なんでもないんです」

「なんでもない、ということはないだろう。俺を呼んでおいて——」

「黙りなさい、ケント！ ケントの言うことは信用しないで、先生！」

「おっ、おう……？」

釘〇にたじたじな杉〇。なんだ、いつものことか。後は、ツツコミ役がいれば……じゃねーや。

「でも、本当に大丈夫——いだだだだ」

意地を張っていると思われるのか、メルにほつぺたをぎゅいつと掴まれてるし、ライリーに足を踏まれている。

「その、なんだ……まずは、三人の名前を教えてください。まだ、顔と名前が一致してなくてな……悪いが、お前の対応はそれからだ。少し、我慢してくれ」

ええ……無能。さつき挨拶したやろ。事前にクラス全員分の情報を頭に叩き込んでおけばいいのに。

でも、この世界の写真技術と個人情報扱いがどれぐらいの物か知らないからな。田舎から出たことないし。というか、俺の体調はどうでもいいから、この場面をどうにか切り抜きたい。

めちやくちや、目立ってしまっている。恥ずかしいな……。

「私の名前は、メルセデス・シユプリームですわ。以後、お見知りおきを」

「僕はライリー・シャトーです。先生……彼を早く……」

「ああ……そうしたいが——お前の名前は？」

「ケント……ケント・アルマーニです……」

意外と素直な幼なじみたちが手短に挨拶を済ませると、ヴォルト先

生の視線は当然、俺の方を向く。見ないでくれ、汚れた俺を——
「おい、ジーク。さっきから手間取っているが、どうしたんだ？」
「ああ、それがな——」

子〇ウウウウウウ!! 某吸血鬼だったり、顔の彫りが深い男性を演じがちなことで有名な〇安さんだ! 体格的に体育教師っぽい。銀髪のロングで髪を一つに結んでいるが、絶妙に似合っている。

右に釘〇。左に石〇。正面に杉〇と子〇。これってつまり——
俺、終わったな。

「……ッ、先生……! 俺を保健室に連れてってください……!」
「だっ、大丈夫か? 分かった。連れていく。ちゃんと俺の肩に掴まれ。二人もこいつが心配だったら、ついてきてもいい」

大きな音をたてて、俺は椅子から転げ落ちた。一応、クラスの担任であるヴォルト先生にしがみつく。助けて、ヴォルト先生——!

「本当に体調が悪そうだな。ジーク、ここは俺が説明しておくから、貴様は先に体調不良の生徒を連れて保健室に行け」

「ああ、助かる。最初から、そのつもりだったがな」

「ううっ……ケント……私を置いて死ぬなんて、許さないんだからっ……!」

「大丈夫だよ、メル。きつと、ケントは大丈夫だよ」

なんて、カオスで豪華なCV……。

その後、俺を保健室まで送り届けてくれた杉——ヴォルト先生は入学式会場に戻り、メルとライリーは様子のおかしい俺を見張ることになった。

「とりあえず、終わったな」

「そうね、終わったわね」

「うん……? 入学式のことだよな? 二人とも?」

時々、ライリーは皮肉じみた言い回しをする。こういうところは天然で腹黒だよな。しかも、怒れない。周りがCV声優だらけで、オタクの俺は色んな意味で学園生活が終わった、ってか? ああん?」

「ケント、拗ねてるのかい？ なにか悩みごとがあつたら、僕たちに話してもいいんだよ」

「そうよー！ 今日のアンタ、なんか変よ!! アンタ、なんか……変な物でも食べたんじゃないの？ 腹でも叩けば少しはマシになるかもしれないわね！ ふんっ！」

同じ幼なじみでこの差……。まあ、心配してくれてる気持ちはちゃんと伝わってるんですが、言えないよなあ。

俺のオタク転生事情なんて……。声オタとか、どう説明すればええねん。

——俺たちの学園生活はこれからだ！ いや、どうせ声優まみれでしょ。声優学校に変更したら？ まあ、アニメなんてこの世界にはないんですけどね！

ってことは、だ。俺はこの秘密を一生、抱えて生きていく訳だ。

はは……俺の人生、詰んだわ。ドンマイ……☆

CVのせいで言い訳に集中できねえ！

心のメモに追加だ。

生徒会長。名前は聞き逃した。聞く機会も絶たれた。きっと、知らぬ存ぜぬが俺のため。

金髪碧眼へきがんのキラキラ王子様。本当に王子かどうかは知らない。

文武両道、多分。

CV花○夏樹。

学園長。名前は不明。

全く学園長の話聞いてなかった。でも、話が短かったことに好感が持てる。

CV池○秀一。

ナンシーは音楽の先生。名字は不明。

俺の偏見だとクソビッチ。ボンキュッボンで長い金髪を巻いている。目の色は青。

巨乳。

CV沢○みゆき。

謎の天才少年。名前は不明。

地雷が多そうで扱いが面倒そうな教師。殺気が強いので今のところ、一番関わりたくない。頭髪は明るい水色。目の色は赤。目のクマがやばい。

眼鏡キャラ、シヨタ、秀才。

CV梶○貴

謎の先生。名前は不明。

ヴォルト先生と親しげ。ライバル関係か？ 長い銀髪を下の方で

結んでいる。鼻が高い。

CV子○武人。

なんだ、この声優遭遇率は。エンカウント狂つとる。

本当に知恵熱がでてもおかしくなくらい、濃い一日だ。といつても、学園生活はまだ始まったばかり。げつそりするし、ゾツともするが、俺だって声優メモをまとめていただけではなかった。

とりあえず、入学式が終わるまでの間、俺は保健室で己おのれの奇行について——必死に弁明しておいたのだ。

「ハア？ 役者と声が似てるから、我を忘れた？ 頭、大丈夫？ アンタの村に劇団なんて、来るはずないじゃない」

「うーん……僕たちはずっと、村にいた訳じゃないから……そうとも言いきれないよ？」

さつそく、CV釘○が論点をズラしにきた。別にクソ田舎に劇団が来てもいいでしょうが。それはともかく、今ならまだ上手く誤魔化せる。

「いや、村を出て劇を見に行つたんだよ……なんだ、その目は。俺を疑うのか？」

「当たり前じゃない！ 面倒くさがりのアンタがわざわざ、村を抜け出して劇を見に行くなんて……ありえないっ！」

「それは、僕も同感だよ」

くっ、生まれ変わってもインドア派なのが裏目に出たな。いいじゃん。見栄を張って、劇を見に行つた設定があつてもいいじゃん。それすらも許されないの？

「劇を見に行くなら、私も誘いなさいよ！ このバカ!!」

「そうだよ、一人で見に行くなんて水臭いよ」

「……それか！ 本題はそれか！ 分かりづらいつて……」

それなら、最初からそう言つて欲しかった。でも、この世界……連絡手段がカスなんだよな。手紙とか、アナログにもほどがある。携帯が恋しい。

魔法はあつても、そういう便利な魔法は金持ちや権力者にだけ行き渡り、庶民の手には届かないらしい。困つたもんだ。

それに、メルの家は知っていても貴族街きぞくがいにあるから遊びに行けないというジレンマもあったが……。ライリーにいたっては、どこに住んでいるのかさっぱり分からず、教えてくれなかった。

随分、誘い甲斐がいもない、誘いようもない面倒な連中だ。しかも、構ってちゃんときた。

「メルの家はでかいし、ライリーの家は知らないし……仕方ないだろ。お前らの方から誘えよなー。俺、ずっと家にいるし……」

哀愁あいしゆう漂う俺の姿を鼻で笑うメル。ライリーは半笑いだ。目は優しいが、口元が引きつっている。

「んもう、怪しき満点だけど……私、とっても優しいから今回は見逃してあげる。感謝することね！」

「……うん、僕も。ケントのことだから、きつと理由があるんだよね。信じてるよ……ケントのこと」

「それ結果的に信じてないよね？ 俺の言ってることを『嘘』だと断じてるよね。おーい」

顔を左右にそらすな、二人とも。やっぱり、俺って嘘が下手すぎ？ 見逃してくれるということなので、お言葉に甘えて今は、見逃してもらおう。

「じゃあ、この話終わりな。不毛すぎる」

「はいはい……まーでも、アンタが役者好きなんて意外よね」

「俺の話、聞いてた？」

「確かにね。それなら、三人で一緒に見に行きたい劇があるんだけど——」

俺の味方はどうやら、この場にはいないらしい。畜生ツツツ!!
「ふうん。じゃあ、それ——三人で見に行くしかないわね」

「うんうん。日にちは、いつにしようか？ メルの都合のいい日は？」
あれ？ 俺には聞かないの？ 視線だけで俺の思いが伝わったのか、石——ライリーが俺の方に振り返る。

「ケントは毎日、予定が空あいてるもんね」

「畜生！ 他にもっとマシな言い方はなかったのか！」

「アハハッ、『暇人』でどうかしら？」

もつとひどいです。

はー、ひどい目には遭あつたが、保健室には俺たち以外誰もいなかった。入学式で保健室直行する生徒は予定外だったのだろうか。

逃げ込んだ先に、声優がいなくて良かった——

「ん？ 先客がいたのか、いや生徒か。ケガをしている訳でもない、風邪でもなさそうだ。君の症状を教えてもらっても？」

ああ、なんだ。ちゃんと保健医がいたのか。タイミングが悪かったな——つて、アア!?

この声は——下〇紘だ！ うっかり聞き逃すところだった。

鬼〇の刃効果で一般人には喚わめき散らすしか、能がないと思われているが正直、我〇善逸は一般人の感覚で戦っているため、作中で親近感が湧きやすいキャラクターであり、重要な役回りを担っている。

ただし、気絶すると強くなるなど、なろう系主人公に近い一面を持つため、一般視聴者は戸惑う。

更に、善〇希望だった花〇夏樹さんと嘴はしびら平伊之助役の松岡〇丞さんをオーディションで押し退けて善〇役を勝ち取ったのだ。まさに、実力派声優と言えるだろう。

「……私の質問に答えられないのか？ それとも、答えたくないのか。どちらかな……」

引き続き、下〇紘の声に耳を傾ける——

この低い声のトーンは——ブラック〇ーズサスペクツのレオ・アビントンの声優を担当していたときに似ているな。下〇紘本人もクル兼中二病なイケメン役でオフアーされるとは思っていなかったと、コメントを残している。

ブラ〇スと言えば、謎のウサギ男からマダオの声がして、ビツクリしたんだよなあ。おっと、いけない。脱線した。

「……自己紹介が遅れたな。警戒しなくていい、私はこの学園の保健室を担当している者だ。君が倒れたときは丁度、別のところにてね……悪く思わないでほしい、ケントくん」

そうそう、こんな風に胡散臭うさんくさくレオ役を演じていた。目の前にいる下〇紘は、黒髪ロングの丸メガネで——ううん、大分、怪しいな。ど

うやったら、そんなマッドサイエンティストみたいなファッションに到達するんだ？

悪い意味で白衣が似合っている。火急かきゆう、速やかに脱いだ方がいいと思う。保健医だけど。

でも、これ——下〇紘だから。警戒するだけ無駄だな。

「ふふ……どうして、私が君の名前を知っているかって、知りたいかい？」

「いや……別に。誰かに俺のことで呼ばれたから、保健室に来たんですよね？ 先生はさつき、なにも知らないフリをしてみましたけど……」

そりゃ知ってるでしょ。と思つて、言い返したらムツとされた。大人げないな。ん？

「あおう、先生……ケントは入学式で疲れてしまっただけのようなので、大丈夫だと思います。僕たちに任せてください」

「それを決めるのは、私だが……？」

「私たちがいるので大丈夫です！ 心配は無用です！」

幼なじみ二人が下〇紘先生から、俺を庇っている？ なんのために……？ それは下〇紘だぞ？ 警戒しなくていいって。

「はあ。なんもしないというのに……。ちよつと、新しい薬を試そうとしただけだ。全く、最近の子供は礼儀がなっていないな」

いや、駄目じゃん。幼なじみグツジョブ！ こいつ、ガチのマッドサイエンティストかよ。

職務放棄、すなー！ もしかして、この学園でストライキですか？

職務放棄ブーム到来ですか？

学園長、人望ないし、人選ミスだな。ワンチャン、声で教師を決めてたりしない？ 声優学校か。

「君たち二人だけでも、入学式に戻ったらどうだ？ 今ならまだ、間に合うぞ」

「すみませんが、幼なじみのそばにいたいので……僕をここにいさせてください」

「私も、私も！」

「はあ……好きにすればいい……」

そう言つて、CV下〇紘の保健医は去つていった。

えっ、どこに？ お前、保健医だろ……。本当にお前は保健医か？
廊下に出て、どこいくねん。保健室にいろ。

まあ、このままマツド教師が居座っていたら、俺の身が危なかつた
けど……。

「……なんか、変な先生だったね。新しい薬を試すとか、不穏な言葉を
言っていたし、本当に保健医かどうか怪しいよ」

「そうよ！ これ以上、ケントに変な真似をするようなら燃やすつも
りだったんだから！ 命拾ひしたわね、エセ保健医！」

「あ……ありがとう」

俺の感謝に対して間違いなく、百点満点の笑顔を返してくれた幼な
じみたち。

持つべきものは幼なじみだな。

頼れる存在にしみじみしながら、和気あいあいと保健室を過ごして
いた――

予定だった。

「あつ、あの……入学式で……倒れていた……人だよな？ 大丈夫
だった……？ あ、私……カリンと申します。よ、よろしくね……？」

入学式もそろそろ終わるだろうというところで、人がやって来た。
保健室の扉を盾にして、隠れている。パステルイエローの頭だけが
ひよっこり出ているが……CVは隠せない。

これは、悠〇碧いいい――!? 鹿〇まどかちゃんのような、消え
入りそうなか細い声ほそが気弱な少女から出ている。

「私たち……く、クラスメイトだよね……？ 気になって、会いに来た
んだけど……迷惑、だった……かな？」

「ううん、そんなことはないよ。カリンさん。入学式の途中で倒れた
ケント、僕の幼なじみを心配して保健室にまで来てくれたんだろう？

迷惑なわけ、ないさ」

「ほっ……よ、良かったあ……」

俺とライリーは、カリンの様子をほっこりと見守っているが……一

方、メルは、カリンのオドオドとした姿に苛立っている。

「なによ、アンタ？」

「な、なにつて……えっ……？　なにか、シユプリームさんの嫌がることをしちやったかな……？　ご、ごめん……」

「——もう！　なんで謝るのよ！　バカ！　なんで、ケントの見舞いにわざわざ来たのか、つて聞いているのよ！」

「……ごめんなさい、ごめんなさい……！」

「うぐぐ……」

どうやら、メルとカリンの相性は最悪らしい。なにか、緩衝材かんしゅうざいがあればなあ……。

「僕は遠慮しておくよ。半分は、鈍いケントのせいでもあるんだからね」

「はあ……っ」

俺が鈍い……だと？　むしろ、ビンビンだと思うが。さっきから、声優ばかりで神経がピリピリしてるよ。

「カリン……ちゃんは謝る必要はないし、メルもそんなに怒る必要はないだろう。ちゃんと会話しろ、二人とも」

「……ごめんなさい」

「ほら！　コイツが謝るからよ！　私は悪くないわ！　カリンが悪いの！」

カリンは蜂蜜色の瞳にうっすらと涙を浮かべている。メルの顔は怒りで真っ赤だ。どうしたもんか。女の扱いは得意でもなんでもないぞ。

むしろ、苦手なくらいだ——ど、童貞どうていちゃうわ！

「えっと……私、本当に……シユプリームさんの嫌がることをしたら、教えて欲しいな……あつ、分からない私が悪いんだけど……ごめ——」

「謝らないで！　その、いきなり怒った私も悪かったわよ。ごめんなさい。ただ……こんなバカを見に来るなんて、どんなバカなのかと思ったの」

バカバカ言いすぎじゃない？　ともかく、和解したようだ。こうい

うときは、下手に男が口を出さない方がいいよな。

「ケントってば……これで気付かないのかい？ 本当に鈍いな……」

「俺、まだなんも言ってるねーだろ……!」

アイコンタクトしかしてない。やれやれするな。

「私のことは、メルでいいわよ。カリン。特別ね」

「ええ……!?! えつと、ありがとう。うん、これから……その……メルさんって呼ぶね。えへへ……」

カリンちゃん、声も相ま^{あい}って可愛いなあ……。メルと違って――

「ちよつと!?! ケント、デレデレしないで！ 灰にするわよ!」

「幼なじみを灰にするとか、ヤンデレ通越して病んでんぞ！ 正気に戻れ!」

万が一、メルが幼なじみの俺に好意を持っていたとしても、普通――灰にしますか？ 燃やしますか？ 死をお前にプレゼントですか？

俺はもつとまともなプレゼントを女の子から貰いたいぞ。俺、おかしなこと言ってるよな？ そうだよな。

「ケント……ガンバー!」

ガンバー! じゃねえよ、石〇ア! どうして、メルの殺意がお前だけに行かないんだ!?! CV石〇だからか? ズルいぞ!

「で、入学式……終わったのか?」

「……わ、私に言ってるの? うん、入学式はもう終わったよ。残念だったね……」

「いや、俺は大丈夫……でも、二人は?」

俺に振り回されることに慣れてる二人なら大丈夫だろうと思ってるが、気にしすぎなクラスメイトがいる手前――聞いておこう。まあ、大丈夫だろう。

「……アンタのせいで最悪よ」

「……僕は、なんとも言えないや……」

アレ!? 想像してたよりも冷めてるなあ! どうしてかなあ!?

やめて、そんなジト目で見ないで!

「そんなことは置いといて、さっきの話に戻ろう。色々あったけど、劇

の話だよ」

「劇……う？　そ、それって……私も混ざっていい話……？」

「うん、もちろん」

くっ、ライリーの野郎……。勝手にカリンちゃんと仲良く話しやがって……。羨まけし——燃やさないでください。メル様？

「……フン。油断も隙もないんだから！」

こんなに物騒なのに、どうしてライリーもカリンちゃんも微笑ましげにこちらを見ているの？　微笑ましい要素一つもないからね？

「……おい、もしかしてカリン……ちゃんも劇に誘うのか？」

「当然じゃない。なんでそんなこと聞くのよ！」

「いや、カリンちゃんの方はどうかな……って」

「……私？」

自然と視線がカリンちゃんの方に集まるのは不可抗力というものだが、注目を浴びている本人は非常にビビって小さくなっている。

「……そうね。コイツ人見知りだし、人間嫌いだし、臭いし、ブサイクだし……本当はケントのことが嫌だけど、カリンだから断れないだけなのかも——」

「言いすぎだろーッ!!」

「え!?　そんなことないよ！　って、あれ？　えっと……あ……冗談……？　冗談なの……？」

俺もカリンちゃんも、すっかりメルのオモチャになってしまっている。恐るべし……C V 釘〇。その声のせいで、理不尽への怒りが鎮まってしまう。

「ケント、ざまあ！　アハハッ！」

俺はまだ婚約破棄どころか、婚約もしてないぞ！　仲間追放もしていない！　ライリーもなんか言ってるやれ！　その声で！

「えっ……ああ、僕の話聞いてくれない人たちなんて、どうでもいいよ……」

こっちはこっちで、拗ねてるし！　俺が話を聞いてやるから——

と思ったら、俺抜きでスケジュール調整を始めやがって、その結果。

学校が休みの日——四人全員の都合が合う日に遊びに行くことになつた。

俺？ ほぼ毎日ヒマだよ？

劇場も見る『劇』の内容も、劇団選びもライリーに任せってしまったから俺はあんまり……よく分かっていない。でも、なんとかなるだろう。

そう——俺はのんきに構えていた。

まさか、劇場が事件現場になるとは思わなかつたんだ！

次回、『俺、死地に赴く』保つてくれよ——

俺の心臓！ 俺の鼓膜！ オタクの魂、百まで。